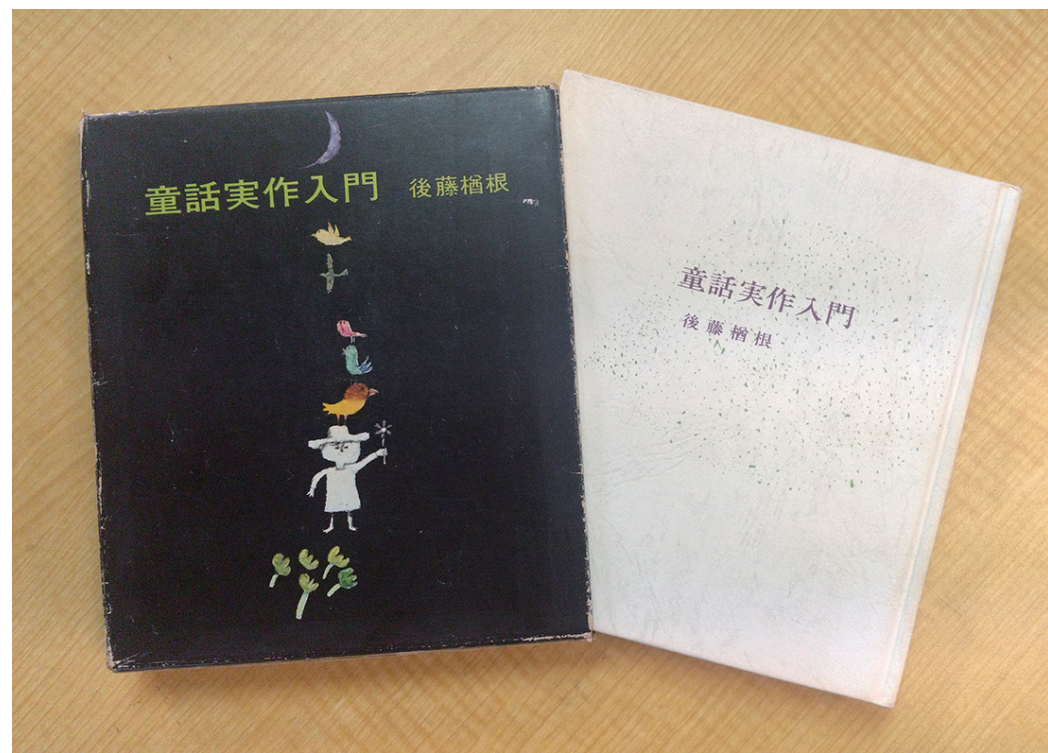




歌川広重と同じだった 童話「田ごとの月」作者 の心の風景

田毎に映る月に かえるもびっくり！ 楽しく美しい 童話があります



後藤樽根さん

「田ごとの月」というタイトルの童話があります。主人公はかえる。水を張った田にいる一匹のかえるは、自分の田に映る月が、一番きれいだと思っていましたが、どの田にも月が同じように美しく映っているのに気づきました。そして「お月さまはみんなのもの」「どの田もどの田もいい田んぼ」と歌い始めると……。仲間であることの大切さ、みんなのものを、みんなで守っていく大切さを感じさせるお話です。

作者は後藤樽根さん（1908～1992）。大分県由布市（旧挾間町）に生まれ、大分師範学校を卒業し、地元の小学校の教師になりました。学生時代から童話を書いたり、童謡を作詞したりしていました。また、月刊誌「童謡詩人」を創刊。全国から童謡作品の応募があり、後藤さんは全国に知られるようになりました。

戦後、後藤さんは「日本童話会」を設立し、優れた童話作家をたくさん育て、児童文学の発展に尽くしました。地元の大分県由布市では、後藤さんの功績を後世に伝えるため「ならねっ子まつり」を開催しています。

全部の田んぼにきれいな月が映ってる。だからかえるたちは仲がいいのかな



童画 たかおかひさえ

田ごとの月 作 後藤樽根

山に囲まれた小さな村に、小さな田んぼが、いくつもありました。

田んぼには、どの田んぼにも、かえるが住んでおりました。

夜になると、どの田んぼにも、お月さまや星が映りました。

だから、どの田んぼのかえるも、お月さまや星は、自分たちのものだと思っていました。

ある、月のきれいな夜でした。一つの田んぼに住んでいるかえるが、声をそろえて歌いました。

♪村じゅうで いちばんいい田は この田んぼ 明るい月も げろつく げろろ

きれいな星も げろつく げろろ

みんな この田に おりてくる げろつく げろろ げこ げこ

すると、どうでしょう。どの田んぼのかえるも、みんな同じ歌を歌いだしたではありませんか。

「おや、みんな、まねをしているな」

一匹のかえるが、あぜにあがって 隣の田んぼをのぞいてみました。

すると、その田んぼにも、お月さまがきれいに映っています。

「おやおや、お月さまはひっこしなされたかな」

そう思って、自分の田んぼを見ると、そこにも映っています。

「おや、どの田んぼにも映っているぞ」

かえるがびっくりして、大声で叫んだので、村じゅうのたくさんのかえるが、みんなあぜにあがってきました。そして、回りの田んぼを見回して、目をぱちくりさせました。

お月さまは、空にたった一つ。けれども、どの田んぼにも映っていました。

さっきのかえるが、歌いだしました。

♪お月さまは みんなのものだ げろつく げろろ

きれいな星も みんなのものだ げろつく げろろ

どの田も どの田も いい田んぼ げろつく げろろ げこ げこ

すると、ほかのかえるたちも、声をそろえて歌いはじめました。どの田んぼのかえるたちも、みんな声をそろえて、歌いだしたので、小さな村の中が、たいそうにぎやかになりました。

「田ごとの月」というタイトルの童話があります。自分の田だけでなくほかの田にも月が映っているのに気づいたカエルが主人公です。カエルたちの大きな合唱の理由にも思いが及ぶ楽しく美しいお話で、信州千曲市の日本遺産「月の都」の魅力紹介になると考え、物語全文を、権利関係者の了解を得て、ガイド冊子「The MOON CITY」（千曲市日本遺産推進協議会発行、さらしなルネサンス制作）に掲載しました（上左の写真）。作者は、日本童話会設立者で優れた童話作家をたくさん育てた児童文学作家、後藤樽根さん（1909～1992、大分県出身）。後藤さんは著書「童話実作入門」で、さらしなの「田毎の月」という言葉に触発されて童話を作ったと明かしており、樽根さんの心の中ではそれぞれの田に月が映っていたからこそ、この作品が生まれたことがうかがえます。

「信濃更科田毎月鏡台山」を描いた江戸時代の歌川広重の心の中と同じだったと思います。

「童話実作入門」によると、樽根さんがこの童話を構想するきっかけは「房州の平原という町に、2、3年いたころのこと」。房州というのは今の房総半島南部一帯。樽根さんは夏の夜、浜に釣りに行って、住んでいた村に帰る時、山あいの田んぼの間の道を通っていました。山あいの田んぼですから、小さな田がいくつも並んで」と記しており、棚田だったことが分かります。そのとき、カエルの鳴き声を耳にしました。そして後藤さんは、さらしなの「田毎の月」が浮かんだことを記します。

カエルのないでいる田のほうを、ふと見たわたしは、はっとしました。どの田にも、月が一つずつ映っているのです。右の田にも、左の田にも、むこうの田にも、こちらの田にも。わたしはふと、そのとき、信州の「田ごとの月」ということばを思い出しました。

後藤さんは実際は、目の前の一つの田に映る一つの月を見ていたはずですが。しかし、小さな田の並びなので、今見たばかりの田の月の残像が残るうちに次の田の月が目に入ってきます。坂道を上ることはそうした体験の繰り返しと積み重ねで、その感動体験は「どの田にも、月が一つずつ映っている」と書かざるを得ないものでした。つまり後藤さんの心の中では、同時にそれぞれの田に月が映っていたのです。実際に一つの場所から同時に田毎に月が見えるかどうかは問題ではなく、心の中で映っているということが重要です。後藤さんにとって「田毎の月」は、その感動を童話に表現するのにぴったりの言葉だったのです。後藤さんはそして、物語の立ち上がりを記します。

わたしは、田んぼに映った月の美しさと、カエルのなき声のにぎやかさにひかれて、しばらく立ちどまっていた。そして、カエルは、なんでこんなに、せいいっぱいいないのだろうかと考えました。そのうちに、その声は、カエルの歌ではないか、と思われてきました。（中略）田ごとに映っている月とカエルの歌声とは、何か関係があるように思えてなりませんでした。

「田ごとの月」とカエルの歌声の関係がどのようなものか」という問いへの後藤さんの答えが、童話「田ごとの月」です。全文をお読みください。物語全文の上にある絵は、千曲市の童画家たかおかひさえさんの作品です。「物語の世界」に依頼して描いてもらったものです。すばらしい作品です。